

浅田宗伯著 橘窓書影を読む 2-031~050

基礎理論 § 現代

峯 尚志

ご指導いただいた北摂中医学研究会の皆様にご感謝いたします。

目次 2-031～040

発表 31,32,33,38,40

2-031 壊証の立て直し（誤治後の感染症転変）

2-032 諸侯の脚気（養生第一・衝心予防）

2-033 肩背強痛と痙癖（延年半夏湯）

2-034 気鬱と拘急（少女の心下鬱塞）

2-035 産後の淋瀝（遺毒の尿血）

2-036 老僧の白濁淋（牛車腎気丸）

2-037 疥癬内攻の水腫（透発と駆毒）

2-038 外感後の脚麻痺（攣急から痿弱へ）

2-039 毒痢（甘汞による重症痢）

2-040 老人の停飲（心下蓄飲・刺痛）

目次 2-041～050

発表 41, 42, 43, 44, 45

2-041 久しき寒泄（下痢から衝逆へ）共考

2-042 腹満水腫（木防已湯の転方）

2-043 外感後の痙癖（飲癖の消解）共考

2-044 吐水と奔豚（互いに制す）

2-045 小児の痙癖労（堅癖と骨蒸）

2-046 外感後の肺癰（排膿）

2-047 反胃（旋覆代赭湯と食養）

2-048 疫眼（風眼を發汗で治す）

2-049 疥癬の耳聾（血燥を潤す）

2-050 脚氣後の痿弱（血氣を滋す）

症例2-31 壊証の立て直し

大久保士佐守、息、喜右衛門。蕃書調所に出役し、一日、外感を得。寒熱甚だしく、洋医、之を療して数日解せず。頭汗大いに出で、足微冷、脈細数、舌上胎ありて渴せず背悪寒す。余、診して曰く、是れ洋医錯治して壊証をなすなりと。姜附益気湯を与へて、服する四五日、頭汗減じ、背悪寒止み、熱大いに発し、舌上黄胎にして渴し、時々譫語、不大便七、八日、心下微満す。因りて大柴胡湯を与へて下し、譫語止む。小柴胡湯加黄連茯苓を与へて熱漸次解するの後、小腹疝動き、拘急時々心下に迫る。当帰四逆加呉茱萸生姜湯を与へて全復す。

❏ 壊証：誤治により正証の壊変する病証。〔漢方用語大辞典〕



意識

大久保士佐守の息子・喜右衛門。蕃書調所に勤めていたとき外感にかかった。寒熱が甚だしく、洋医が数日治療しても解けない。頭から汗が多く出て、足はやや冷え、脈は細数、舌に苔があるが口は渴かず、背中が悪寒する。著者は、これは洋医の誤治による壞証だと診た。姜附益気湯（補中益気湯加乾姜附子）を与えると、四、五日で頭汗が減り背の悪寒が止んだが、今度は熱が大いに発し、舌は黄苔で口が渴き、ときどきうわごとを言い、七、八日大便がなく、みぞおちがやや張る。そこで大柴胡湯で下すとうわごとが止んだ。小柴胡湯に黄連・茯苓を加えて熱が次第に解けた後、下腹の疝が動いて引きつり、ときどきみぞおちに迫る。当帰四逆加呉茱萸生姜湯を与えて全快した。

深考

西洋医学的には、感染症の経過中に治療がかみ合わず遷延・転変した例と考えられる。初診時の頭汗・足の冷え・脈細数・舌に苔があるのに口渇なし・背悪寒は、表の実熱ではなく、陽気が損なわれて表に虚熱が浮いた状態（誤治後の壞証）であり、著者は洋医の発汗・解熱が陽を傷ったと読む。まず姜附益気湯で陽気を温め補い、表の虚した状態を立て直す。陽気が回復すると今度は熱が裏に集まり、黄苔・口渇・譫語・便閉・心下満という陽明の腑実が現れたので、大柴胡湯で下す。残る少陽の熱は小柴胡湯加黄連茯苓で和解清熱する。最後の下腹の疝痛・拘急は血虚に寒が乗った厥陰の証とみて当帰四逆加呉茱萸生姜湯で温め養う。誤治で乱れた病位を、温補から攻下、和解、温養へと段階的に整え直した経過である。

この処方の流れはあまりに場当たりの？

宗伯は先ず補中益気湯に乾姜、附子で体力のベースをあげて、本来の熱がでる状態にして、大柴胡湯を投与しているが、大便が7, 8日も出ない状態にして大柴胡湯というのはいかななものかと思う。私なら、柴胡桂枝乾姜湯：柴胡、桂皮、栝楼根、黄芩、牡蛎、乾姜、甘草去栝楼根加人参からはじめるかなと思う。もっと早く柴胡湯加減で清熱しつつ補気して熱がこもりるのであれば知母、石膏を加えるなり、他の工夫はなかったのかと思う。疝気があがり、ひきつりみぞおちに迫るというのも柴胡桂枝湯的な処方でもよかったのではないかと思う。

処方解説

姜附益気湯：補中益気湯（黄耆・人参・白朮・甘草・当帰・陳皮・升麻・柴胡）に乾姜・附子を加えた方とされる。中気を温補し、誤治後の陽虚を立て直す。経験的な変方で、乾姜・附子の加味が要点。

大柴胡湯《傷寒論》：柴胡・黄芩・半夏・芍薬・枳実・大黄・生姜・大棗。少陽と陽明を和し下す。

小柴胡湯《傷寒論》加黄連・茯苓：柴胡・黄芩・半夏・人参・甘草・生姜・大棗に黄連・茯苓を加える。和解に清熱と利水を添える。

当帰四逆加呉茱萸生姜湯《傷寒論》：当帰・桂枝・芍薬・細辛・甘草・木通・大棗・呉茱萸・生姜。血虚に寒を兼ねた厥陰の証を温め通す。

症例2-32 諸侯の脚気

寺社奉行、笠間侯。脚気を患ひ、両脚麻痺、遍身水気あり歩行すれば短気喘促す。余、越婢加朮湯合唐侍中一方を与へ、深く諭して曰く、諸侯の脚気は多く飲食の濁気下流と腎気不足とによる。若し飲食を慎まず膏粱飽過すれば、濁気益々流溢し遂に衝心す。或は微腫些癒と雖も房を節せず、下元の気耗損すれば忽ち上冲す。故に諸侯脚気に嬰りて死する者、平人に比すれば十倍なり。請ふ之を省せよ。侯も亦た先代脚気衝心して卒するを目撃するを以て大いに懼れ、飲食を淡にし、閨房を遠ざけ、不日に水気減じ、但だ麻痺、心下気塞を覚え、因りて九味檳榔湯去将加呉茱萸茯苓を与へ数日にして全快出勤す。

□ 閨房：ねや。寢室。〔広辞苑〕

意識

寺社奉行の笠間侯。脚気を患い、両脚が麻痺し、全身に水気（むくみ）があって、歩くと息切れして喘ぐ。著者は越婢加朮湯に唐侍中の一方を合わせて与え、深く諭した——諸侯の脚気の多くは、**美食による**濁気の下流と腎気の不足による。飲食を慎まず飽食すれば濁気がますます溢れ、ついに心に衝き上げる（衝心）。たとえ少し腫れが引いても房事を節しなければ下元の気が損なわれ、たちまち上衝する。**だから諸侯で脚気にかかって死ぬ者は、平人の十倍も多い。**よく省みられよ、と。侯も先代が脚気衝心で亡くなるのを目撃していたので大いに恐れ、飲食を淡泊にし房事を遠ざけた。間もなく水気が減り、ただ麻痺と**心下のつかえ**が残ったので、九味檳榔湯から(大黄)一味を去り呉茱萸・茯苓を加えて与え、数日で全快して出勤した。侯は城中で井上信濃守に「私の病は宗伯の薬ではなく、宗伯の言葉で治った」と語ったという。

深考

西洋医学的には脚気で、心不全（脚気衝心）への進展が懸念される例である。著者の眼目は処方より生活指導にある。諸侯の脚気は美食による湿濁の下流と房事過多による腎気の損耗が重なって起こり、節制しなければ濁気が溢れて心に衝き上げる（衝心）と説く。越婢加朮湯に唐侍中の一方を合わせて発越利水しつつ、飲食を淡白にし房事を慎ませたことで水気が減じた。残る麻痺と心下のつかえには九味檳榔湯加呉茱萸茯苓で行気利水・降逆する。侯自身が「薬でなく言葉で治った」と語ったように、養生（食と房事の節制）を本治、薬を従とする姿勢が前巻の気鬱例（2-029）と通じる。**脚気衝心の予防に生活管理を据えた点が要**である。しかし当時は脚気の原因がビタミンB1不足ということを知らず、美食が原因として、白米をやめ、玄米や、稗や粟、麦、蕎麦のようなビタミンB1を含む雑穀を素食として食べたものは治癒に向かっただろうが、ただ粗食にしてビタミンB1を含む食材を取らなかった者は悪化していったであろう。一方美食家で白米をやめなくても豚肉をよく食べる人は脚気にはならなかったであろう。ただし当時の江戸は肉食の習慣はまだ一般的ではなかった。

処方解説

越婢加朮湯《金匱要略》：麻黄・石膏・生姜・甘草・大棗・白朮。発越して水を利用す。本案は唐侍中の一方を合方する。

唐侍中湯（唐侍中の一方）：檳榔、木瓜、橘皮、生姜、呉茱萸、蘇葉

九味檳榔湯：檳榔子・厚朴・桂枝・橘皮・蘇葉・甘草・大黄・木香・生姜。本案は一味を去り呉茱萸・茯苓を加える。

こんな人に何をにつかう

夕方になると脚がむくむ。

靴下の跡がつく。

脚が重だるく、張って歩きにくい。

お腹も何となく張る。

冷えると悪化する。

便通もすっきりしない。

九味檳榔湯は、ただの「むくみの薬」ではない。

主役は檳榔子

役割	生薬	はたらき
主役	檳榔子	行気・利水・消腫 ― 気を動かし、水を下へ流す
気を巡らす	厚朴・橘皮・木香・蘇葉	張って滞った「気」を動かす
温めて動かす	桂皮・生姜	冷えて動きにくくなった気・水を動かす
下へ抜く	大黄	鬱滞を下から抜く
全体を調える	甘草	諸薬を調和する

気が滞る → 水も動かない → 脚がむくむ、張る、重だるい。

そこで、気を動かす。水を動かす。そして下へ流す。

九味檳榔湯の鑑別

— 同じ「むくみ」でも、ここが違う —

処方	キーワード	むくみのイメージ
九味檳榔湯	気滞＋水滞	張る・重い・だるい・腹も張る
防已黄耆湯	気虚＋水滞	ゆるい・疲れる・汗をかく
五苓散	水の偏在	口渇・尿不利・頭痛・めまい
当歸芍薬散	血虚＋水滞	冷え・顔色不良・めまい
真武湯	陽虚＋水滞	強い冷え・倦怠・ふらつき・下痢

なぜ檳榔子なのか

檳榔子（びんろうじ）

ヤシ科ビンロウ Areca catechu の成熟種子

【檳榔子の働き】

行気	滞った気を動かす
利水	停滞した水を動かす
消腫	浮腫・腫脹を軽減する
降気	気を下へ降ろす
導滯	腸管の停滞を動かす

檳榔子は、水が多いから抜くのではない。気が動かないから、水も動かない。
だったら、まず気を動かしてその流れを「下」へ持っていく。

だから、

脚が張る。むくむ。重い。お腹も張る。便もすっきりしない。

そんな「下半身の渋滞」に檳榔子が奏功する。

なぜ、呉茱萸・茯苓を加えるのか？

九味檳榔湯は、檳榔子を主役に気を巡らせ、水を下へ動かす処方である。しかし脚気が進むと、下肢に停滞した水気が上へ衝き、動悸、息苦しさ、胸部圧迫感などを呈することがある。これが「脚気衝心」である。

そこで加えるのが呉茱萸。単なる「冷え対策」ではない。温めながら、上へ衝き上がる気を降ろす＝温中降逆が狙いである。

一方、茯苓は利水・健脾によって水滯そのものをさばく。

檳榔子：気を動かして水を流す

呉茱萸：上へ衝く気を降ろす

茯苓：余分な水をさばく

つまり呉茱萸＋茯苓は、

「下にたまる水」と「上に衝く気」の両方を処理する加味。

症例2-33 肩背強痛と痙攣

室街二丁目、木屋又兵衛、妻。肩背強痛甚だしく、時に眩冒倒れんとす。夜間恍々眠ること能はず。余、之を診するに、左脇下塊あり。胸中動悸、頭眩すれば必ず胸動咽喉に迫ると云ふ。乃ち延年半夏湯を与ふ。五、六日を経て肩背強痛忘るるが如し。而るに動悸自若たり。千金温胆湯加酸棗仁を与へ、数日にして全愈す。世医、肩背痛を診すれば、概して湿痰とし、清湿化痰湯、二朮湯を与ふ。余、数年之を療するに、湿痰に属する者、十の一に過ぎず。中年肩背痛を患ふるもの、多くは痙攣による。故に延年半夏湯速効を奏す。

意識

室街二丁目の木屋又兵衛の妻。肩と背の強い痛みが甚だしく、ときにめまいがして倒れそうになり、夜は不安で眠れない。診ると左脇の下に塊があり、胸中に動悸があって、頭がくらむと必ず胸の動悸が咽喉に迫るという。延年半夏湯を与えると、五、六日で肩背の痛みが消えたようになった。だが動悸はそのままだったので、千金温胆湯に酸棗仁を加えて与え、数日で全快した。世の医者には肩背痛を診ると、たいてい湿痰として清湿化痰湯や二朮湯を与える。しかし私が数年治療した経験では、湿痰によるものは十に一つにすぎない。中年の肩背痛の多くは瘀癖による。だから延年半夏湯が速効を奏す。風湿や湿痰によるものには葛根加朮附湯と滾痰丸の兼用、血分によるものは千金独活湯、血虚のものは十味剉散、気痛によるものは烏薬順気散が特効する。

深考

西洋医学的には肩こり・頸肩腕症状に、めまい・動悸・不眠を伴った例である。著者は安易に湿痰（肩こりの常套）とせず、左脇下の塊・胸動・気の上衝という所見から瘀癖（脇下の積で気が滞ったもの）と診ている。延年半夏湯は半夏・檳榔子・枳実・桔梗・柴胡で痰と気の停滞を降ろし、鼈甲で脇下の積を軟らげ、呉茱萸・生姜で寒を温め、人参で胃を支える方で、瘀癖による肩背痛に的中する。肩背痛が取れた後に残る動悸・不眠は痰飲が心神を擾したものとみて千金温胆湯加酸棗仁で痰を化し心神を安んじる。末尾の鑑別（湿痰は十に一、中年は瘀癖が多い、血分・血虚・気痛で方を分ける）は、同じ肩背痛でも病因を見極めて方を選ぶという本案の核心を一般化したものである。

延年半夏湯

- 半夏・柴胡・鼈甲・桔梗・檳榔子・人參・生姜・枳実・呉茱萸
- 延年半夏湯は、慢性化した胃腸障害において、痰飲と気滯が心下から胸脇に停滞した病態を治す処方である。半夏は痰飲を除き胃気を降ろし、悪心や心下の痞えを治す。柴胡は胸脇の気滯を疏通し、枳実・檳榔は停滞した気を破って下降させる。鼈甲は軟堅散結により、慢性化して固定した心下・胸脇の凝結を解く。桔梗は胸膈を開き、檳榔・枳実の降気作用と相まって上下から気機を調整する。呉茱萸・生姜は中焦を温めて胃気の上逆を鎮め、人參は長期の胃腸障害で衰えた中気を補う。したがって本方は、心下痞硬、季肋部痛、肩背部の凝り、悪心、足冷などを目標とし、化痰降逆、開胸理気、軟堅散結によって心下から胸脇に固着した痰と気を解く方剤である。

痞癖と延年半夏湯

- 痞癖とは、気・血・痰・水が長く停滞し、胸脇や腹部に塊や索状の硬結を形成した病態である。単なる腹部腫瘍ではなく、肩背痛、胸脇苦満、心下痞、動悸、めまい、不安、不眠など多彩な症状を伴うことが特徴である。治療の基本は、まず気滞を解き、痰飲を除き、必要に応じて瘀血を改善し、硬結を軟らかくして散じることである。浅田宗伯は、中年者の肩背痛の多くは風湿や湿痰ではなく痞癖によると考え、延年半夏湯を第一選択として用い、速やかな鎮痛効果を得ている。
- 延年半夏湯は『千金方』を原典とする処方で、痞癖や胸脇部の硬結、気滞と痰飲が互いに結んで生じる諸症状を治療する代表方である。構成生薬は半夏、柴胡、別甲、枳実、檳榔、桔梗、人参、茯苓、前胡、生姜、甘草からなり、気を巡らせ、痰を除き、硬結を軟らげて散じる作用をもつ。**適応は胸脇苦満、心下痞、肩背痛、脇下の腫塊、動悸、めまい、不安、不眠などであり、とくに痞癖による肩背痛に優れる。**浅田宗伯は『橘窓書影』において、中年者の肩背痛の多くは湿痰ではなく痞癖によると述べ、本方を第一選択として用い、短期間で疼痛が軽快した症例を数多く記載している。現代的には、気滞・痰飲・軽度の瘀血が複雑に絡み合った慢性疼痛や自律神経症状を伴う病態に応用できる処方と考えられる。

千金温胆湯について

- 半夏、竹茹、枳実、陳皮、茯苓、甘草、生姜、大棗
- 千金温胆湯は『備急千金要方』を原典とする処方で、温胆湯を基礎に、心血を養い精神を安定させる生薬を加えた後世方である。**気滯や痰熱によって心神が乱れた病態**に用いられ、動悸、不安、不眠、驚きやすさ、めまい、健忘などを目標とする。流派によって人參、遠志、熟地黄を配合するものと、浅田宗伯のように症状に応じて酸棗仁を加味するものがある。方意は、痰を除いて胃気を和し、気機を整え、心胆を安んじて精神を安定させることにある。『橘窓書影』では、延年半夏湯で痙癖による肩背痛が改善した後も動悸や不眠が残存した症例に酸棗仁を加えた千金温胆湯を投与し、短期間で全快したと記されている。痰飲と気滯を背景とした自律神経症状や精神神経症状を伴う病態に適した代表的な処方である。

処方1

延年半夏湯

目標：心下痞硬・胸脇の痞塞感・慢性の痰飲・上腹部～胸部の疼痛

半夏、柴胡、別甲、枳実、檳榔、桔梗、人参、茯苓、前胡、生姜、甘草

千金温胆湯

目標：痰飲＋気鬱・不眠・不安・動悸・驚きやすい・胸苦しさ

半夏、竹茹、枳実、陳皮、茯苓、甘草、生姜、大棗、遠志、酸棗仁
（浅田宗伯はさらに酸棗仁を加味して用いることが多い）

清湿化痰湯

目標：湿痰による肩・上肢の疼痛、しびれ・重だるさ・運動障害

蒼朮、白朮、陳皮、半夏、茯苓、天南星、黄芩、羌活、威靈仙、甘草、生姜

二朮湯

目標：痰湿による肩関節痛・五十肩・上肢痛、挙上困難

白朮、蒼朮、半夏、茯苓、陳皮、天南星、香附子、黄芩、羌活、威靈仙、甘草、生姜

葛根加朮附湯

目標：寒湿による頸肩背部のこわばり・疼痛・冷え、慢性化した項背強

葛根、麻黄、桂枝、芍薬、生姜、大棗、甘草、白朮、附子

処方2

滾痰丸

目標：頑固な痰火・胸部の痞塞・精神神経症状・めまい・動悸・痰による諸症

大黄、黄芩、青礞石、沉香

千金独活湯

目標：風寒湿による腰脚痛・しびれ・麻痺・歩行困難、下肢の冷え

独活、当帰、芍薬、桂枝、生姜、甘草、人参、茯苓、防風、細辛、秦艽、川芎、杜仲、牛膝、地黄

十味劉散

目標：気血虚＋風寒湿による四肢のしびれ・麻痺・疼痛・筋力低下

当帰、川芎、芍薬、地黄、白朮、桂枝、防風、黄耆、茯苓、附子

烏薬順気散

目標：気滞＋風痰による半身不随・しびれ・麻痺・言語障害・四肢のこわばり

烏薬、麻黄、陳皮、枳殻、白芷、川芎、桔梗、乾姜、甘草、生姜

礞石

項目	内容
読み	礞石（もうせき）
主に使うもの	青礞石
性味	甘・鹹、平
帰経	肺・肝
主作用	墜痰下気、平肝鎮驚
特徴	普通の化痰薬では取れない老痰・頑痰を下す
適応	痰が深く固着し、気逆・喘咳・癲狂・驚癇などを起こす状態

- 礞石は重い鉱物の性質を利用して、上逆した痰火を強引に下へ墜とす。

症例2-34 少女の気鬱

飯田街二合半坂、鈴木真之介、妹、年十七。心下鬱塞、腹裏拘急、不大便、数日不食、怏々として楽しまず。医、労とし之を療して効なし。余、大柴胡加香附子甘草を与ふ。数日にして腹中和し、食少しく進む。時に肩背強急痛、顧視することを得ず。延年半夏湯を与へて治す。後、四肢攣急或は物に驚惕す。抑肝散加芍薬を与へ数旬にして全愈す。筭橋、横山七左衛門、妹。同証を患ひ然れども此の婦人に比すれば、拘急少なく、左肋より肩背に凝結し気鬱甚だし。延年半夏湯加甘草を与へ獺肝丸を兼用し数旬にして愈ゆ。

意識

飯田街二合半坂の鈴木真之介の妹、十七歳。みぞおちが塞がって苦しく、腹がひきつり、便が出ず、数日食べられず、ふさぎ込んで楽しまない。医者は虚勞として治療したが効かなかった。大柴胡湯に香附子・甘草を加えて与えると、数日で腹中が和らぎ少し食べられるようになった。そのとき肩と背が強くこわばって痛み、振り返ることもできない。延年半夏湯を与えて治した。後に四肢がひきつり、物に驚きやすくなったので、抑肝散に芍薬を加えて与え、数十日で全快した。筭橋の横山七左衛門の妹も同じ症状を患ったが、この婦人に比べると拘急は少なく、左肋から肩背に凝り固まって気鬱が甚だしい。延年半夏湯に甘草を加えて与え、獺肝丸を併用して数十日で治った。

深考

西洋医学的には思春期女子の心身症的な消化器症状（食欲不振・便秘・抑うつ）で、虚労（結核様の消耗）と紛らわしい。著者は「労」と決めつけず、心下の鬱塞・腹裏の拘急・脈証から実の気滞と読み、大柴胡湯に香附子・甘草を加えて気を巡らせ通じさせる。続く肩背強急は気滞が上に及んだ痙癖とみて延年半夏湯、四肢攣急・驚きやすさは肝の高ぶりとみて抑肝散加芍薬で肝を抑え筋を緩める。併記の横山の妹は拘急が軽く気鬱が甚だしいので延年半夏湯加甘草に獺肝丸を併せる。いずれも虚労として補うのでなく、気滞・肝鬱を疏通する方向で治しており、若年女子の不定愁訴を虚と早断しない戒めになっている。

処方解説

大柴胡湯《傷寒論》加香附子・甘草：柴胡・黄芩・半夏・芍薬・枳実・大黄・生姜・大棗に香附子（理気）・甘草を加える。

延年半夏湯《外台秘要》：半夏・柴胡・鼈甲・桔梗・檳榔子・枳実・人参・呉茱萸・生姜。

抑肝散《保嬰撮要》加芍薬：当帰・釣藤鈎・川芎・白朮・茯苓・柴胡・甘草に芍薬を加える。肝の高ぶりを抑え筋の攣急を緩める。

獺肝丸：獺肝（カワウソの肝）を主とする丸。労瘵・疝癖に用いる経験方。

獺肝はなぜ労瘵に効くのか？ — 現代医学的仮説

獺肝（カワウソの肝）

古来、「伝尸・労瘵」「労虫」を治す動物生薬として使用された。

① ビタミンA（レチノイド）仮説

肝臓は ビタミンA（retinyl ester）の主要な貯蔵臓器

獺獺肝 → Vitamin A（retinol）→ ATRA → マクロファージ活性化 → オートファジー・lysosome成熟促進 + cholesterol利用制限 → M. tuberculosis 増殖抑制

→ 古典でいう「殺労虫」に対応する可能性？

② 栄養補給効果

肝臓には

蛋白質・Vitamin A・Vitamin B12・葉酸・鉄・微量元素
が豊富。

労瘵に伴う低栄養・消耗・貧血を改善した可能性。

③ 鉄は主役とは考えにくい

鉄は造血には有用だが、M. tuberculosis自身も鉄を必要とする。

→ 「鉄が豊富だから抗結核作用」という単純な説明は困難。

古典と現代医学をつなぐ仮説

「癩肝 → 殺労虫 → 労瘵を治す」

⇕

「肝臓Vitamin A → ATRA → macrophage活性化 → 抗M. tuberculosis作用」

⚠ 癩肝そのものの抗結核作用が証明されたわけではない。

あくまで古典的経験則を説明し得る現代医学的仮説である。

症例2-35 産後の淋瀝

神田河井新石町、割烹家銀子棲、妻。産後小便淋瀝、痛甚だしく厠に上れば振寒仆れんとす。時々寒熱往来、小腹塊ありて、之を按ずれば、痛み小便漏れんとし数月愈えず。余、逍遙散加山梔子牡丹皮を与へ硝石大円を兼用す。数日にして寒熱去り小腹塊和らぐ。小便淋瀝故の如し。猪苓湯加大黄を与へ乱髪霜を兼用す。不日、全愈を得たり。此より先、月池、能勢十次郎、室。産后小便淋瀝、尿血を下すこと半月許り。医治、効なし。余、之を診するに妊娠中疥癬を患ひ、分娩後自然愈て此の症を発すと云ふ。余、即ち其の遺毒とし、解毒剤加滑石阿膠車前子を用ひ乱髪霜を兼服せしむ。尿血止み淋痛数日にして全愈す。



意識

神田河井新石町の割烹家・銀子棲の妻。産後に小便が出しづってぽたぽたと垂れ、痛みが甚だしく、便所に上がると寒気がして倒れそうになる。ときどき寒熱往来があり、下腹に塊があって、押さえると痛んで小便が漏れそうになり、数か月治らない。逍遙散に山梔子・牡丹皮を加えて与え、硝石大円を併用すると、数日で寒熱が去り下腹の塊が和らいだ。小便の出しづりは相変わらずだったので、猪苓湯に大黄を加えて与え、乱髪霜を併用すると、間もなく全快した。これより前、月池の能勢十次郎の妻が、産後に小便が出しづり半月ほど血尿を下した。医者の治療は効かなかった。診ると、妊娠中に疥癬を患い、分娩後に自然に治ってこの症が出たという。私はその遺毒とみて、解毒剤に滑石・阿膠・車前子を加えて用い、乱髪霜を併せて服させた。血尿が止まり、出しづりの痛みも数日で全快した。

深考

西洋医学的には産褥期の尿路感染・血尿（膀胱炎ないし結石）で、寒熱往来・小腹の塊を伴う遷延例と考えられる。著者は肝鬱と血熱が下焦に及んだものとみて、まず加味逍遙散（逍遙散加山梔子牡丹皮）で肝を疏し血分の熱を清め、硝石大円で結を下す。寒熱と塊が緩んだ後、残る淋痛には猪苓湯加大黄で利水通淋・清熱し、乱髮霜（血余炭）で止血する。併記例は妊娠中の疥癬が分娩後に内攻した遺毒とみて、解毒剤に滑石・阿膠・車前子を加えて駆毒・利水・止血した。産後の淋を一律に虚としてではなく、肝鬱血熱や遺毒という原因別に治し分けた点が要である。

処方解説

逍遙散《和剤局方》加山梔子・牡丹皮（加味逍遙散）：当帰・芍薬・白朮・茯苓・柴胡・甘草・生姜・薄荷に牡丹皮・山梔子を加える。肝を疏し血熱を清める。

硝石大円：硝石・大黄・人参・甘草

猪苓湯《傷寒論》加大黄：猪苓・茯苓・沢瀉・滑石・阿膠に大黄を加える。利水通淋・清熱。

乱髪霜：乱髪を黒焼きにした血余炭。止血・利水。

解毒剤＝香川解毒剤：山帰来（土茯苓）・川芎・大黄・茯苓・木通・忍冬（金銀花）・甘草
香川解毒剤は本来梅毒などの「毒」を治療する処方として有名だが、浅田はそれよりかなり広く「体内に残った毒」に応用し梅毒・皮膚疾患・淋病などにもちいられた。

症例2-36 老僧の白濁淋

三田小山、栄隆寺、主僧、年七十余。淋を患ひ数日愈えず。小便白濁、其の痛み腰にひき苦楚言ふべからず諸薬寸効なし。余、濟生牛車腎気丸料を与ひ、蒲滑散を兼用し其の病漸々愈ゆ。

意識

三田小山の栄隆寺の主僧、七十余歳。淋（排尿の病）を患い数日治らない。小便が白く濁り、その痛みが腰に引いて苦しみは言いようがなく、諸薬は少しも効かない。濟生牛車腎気丸料を与え、蒲滑散（蒲黄、滑石）を併用すると、その病が次第に治った。

蒲黄（ほおう）はガマ科植物のガマ（蒲）の花粉を乾燥した生薬で、性味は甘・平、肝・心包経に入る。最大の特徴は止血と活血の両作用を兼ね備えることで、出血を止めながら瘀血を除き、疼痛を改善する点にある。吐血、咯血、鼻出血、血尿、血便、月経過多など幅広い出血性疾患に用いられるほか、打撲や外傷、産後腹痛、狭心症様胸痛など瘀血による疼痛にも応用される。また、利尿・通淋作用を有し、血淋や石淋など排尿痛や血尿を伴う淋証にも古くから使用されてきた。生用では活血化瘀作用が強く、炒炭すると止血作用が増強されるため、目的に応じて使い分ける。『金匱要略』の蒲灰散をはじめ、多くの方剤に配合され、出血と瘀血が併存する病態に欠かせない生薬である。

深考

西洋医学的には高齢男性の排尿障害（前立腺肥大・慢性前立腺炎や尿路感染）で、白濁尿と腰に引く痛みを伴う。著者は年齢と腰への放散痛・白濁から腎陽の虚を本とみて、濟生牛車腎気丸（八味丸に牛膝・車前子を加え腎陽を温補し利水する）を主とし、蒲滑散（蒲黄・滑石）で淋痛を通利する。清熱通淋の対症だけでは治らない高齢者の淋を、下元を温め補いながら利水するという本治・標治の組み合わせで治めている。実証の淋（清熱通淋）と虚証の淋（温補）を、年齢・所見で見分けた例である。

処方解説

牛車腎気丸《濟生方》：地黄・山茱萸・山薬・沢瀉・茯苓・牡丹皮・桂枝・附子・牛膝・車前子。腎陽を温補し利水する。

蒲滑散：蒲黄・滑石を主とする方。淋痛を通利する。

症例2-37 疥癬の内攻

本所、柳原街、山形屋清三郎、年五十余。疥癬を患ひ少しく愈ゆるの後、遍身洪腫、小便不利、腹満気急、水気将に内攻せんとす。余、沈香降気合豁胸を与へ三聖丸を兼用す。服する七、八日、水気大いに減じ疥癬再び発す。濟生赤小豆湯を用ひて水気全く去り、瘡大いに茂す。因りて巴豆酒を用ひて揮発し大患全治す。



意識

本所柳原街の山形屋清三郎、五十余歳。疥癬を患い、少し治った後、全身がひどく腫れ、小便が出ず、腹が張って呼吸が切迫し、水気が今にも内攻しようとしていた。沈香降気湯に豁胸湯を合わせて与え、三聖丸を併用すると、七、八日で水気が大いに減り、疥癬が再び出た。濟生赤小豆湯を用いて水気がすっかり去り、瘡が大いに盛んになった。そこで巴豆酒を用いて（患部に）揮発させ、大患が全治した。

深考

西洋医学的には皮膚疾患後の全身浮腫（腎性または栄養性）で、呼吸切迫を伴う重症化と考えられる。前巻2-017と同型で、皮毒の内攻が水腫をなすという理解である。まず沈香降気合豁胸湯で気を降ろし胸を寛げ、三聖丸で水を逐って急場（気急）を制す。水が減ると疥癬が再び体表に出る（毒が表へ向かう徴）ので、濟生赤小豆湯で利水を続けて水を去り、瘡を十分に発させる。最後に巴豆酒の外用で残る皮毒を揮発させ根を断つ。内攻した水毒をまず内から下し、ついで毒を表へ透発させて外から処理して表裏から病毒を駆除している。

処方解説

豁胸湯：桑白皮・呉茱萸・犀角・茯苓

和田東郭が『外台』の桑白皮・呉茱萸の二味方に犀角・茯苓を加えて「豁胸湯」と名づけたもの
「脚気毒衝心、昏悶して死せんと欲するを治す」
利水＋降逆＋清熱により、脚気毒の上衝による急喘・胸悶・昏悶を治す。

沈香降気湯《和剤局方》：沈香；縮砂；香附子；甘草
胸膈に鬱滞・上逆した気を下降させ、胸満・上気・喘急を治す降気剤。

三聖丸： 蛇黄、禹余糧、鍼砂　すべて鉄を含む鉱物

寒湿が凝結して腹中に「水積」を形成 → 煅製した鉄鉱物の「熱・燥」で痞滞を開く → 水腫・鼓脹を改善する

濟生赤小豆湯：赤小豆、麻黄、連翹、生姜、桑白皮、大棗、杏仁、赤茯苓、沢瀉、当帰、商陸、甘草

巴豆酒：巴豆を浸した酒。外用で患部に用い皮毒を揮発させる。

症例2-38 外感後の脚麻痺

金局吏、田中忠八郎、次女（坂本田村某妻）。平素気塞、腹裏拘急、一朝、外感し熱甚だしく発汗して不解。往来寒熱、心下急、微嘔、舌上白胎、食進まず。小柴胡湯を与へて自若たり。大柴胡湯を以て微かに下す。熱稍や解し、心下開き飲食微かに進む。小便利す。後、熱全解し麻痺愈えず、両脚攣急屈伸する能はず。桂枝加朮附湯を与へ芍薬甘草礬石一味（一閑斎の方）を以て脚を浸し数日、攣急止む。瘦弱起つことを得ず。濟生腎気丸加鹿角を用ひて全愈す。

意識

金局の役人・田中忠八郎の次女（坂本田村某の妻）。平素から気がふさがり腹がひきつっていたが、ある朝、外感にかかって熱が甚だしく、発汗しても解けない。寒熱往来、みぞおちの急迫、軽い嘔気、舌に白苔、食が進まない。小柴胡湯を与えたが変化がなかった。大柴胡湯で軽く下すと、熱がやや解け、みぞおちが開いて飲食が少し進み、小便が通じた。後に熱はすっかり解けたが麻痺は治らず、両脚がひきつって屈伸できない。桂枝加朮附湯を与え、芍薬・甘草・礬石の一味（一閑斎の方）で脚を浸すと、数日で攣急が止んだ。なお痩え弱って立てなかったので、濟生腎気丸に鹿角を加えて用い、全快した。

深考

西洋医学的には感染症の後に下肢の運動障害（攣急・痿弱）が残った例で、脚気あるいは消耗後の筋力低下を思わせる。外感期は少陽陽明の証で、小柴胡湯から大柴胡湯へと和解・微下して熱を解く。熱が去った後の両脚攣急・屈伸不能は寒湿が筋脈を阻んだものとみて桂枝加朮附湯で温陽除湿し、外用の芍薬甘草礬石（芍薬甘草で筋を緩め礬石で湿を収める）で脚を浸して攣急を止める。残る痿弱（立てない）は肝腎の虚とみて濟生腎気丸（牛車腎気丸）に鹿角を加え、腎陽と精血を補って起立を回復させる。内服と外用を併せ、攣急（実）から痿弱（虚）へ移る病態に合わせて治法を温散から温補へ転じている。

処方解説

小柴胡湯《傷寒論》：柴胡・黄芩・半夏・人参・甘草・生姜・大棗。

大柴胡湯《傷寒論》：柴胡・黄芩・半夏・芍薬・枳実・大黄・生姜・大棗。

桂枝加朮附湯：桂枝・芍薬・甘草・生姜・大棗・白朮・附子。温陽除湿。

芍薬甘草礬石（外用・一閑斎の方）：芍薬・甘草・礬石を煎じて患部を浸す。筋の攣急を緩め湿を収める。

濟生腎気丸（牛車腎気丸）加鹿角：地黄・山茱萸・山薬・沢瀉・茯苓・牡丹皮・桂枝・附子・牛膝・車前子に鹿角を加える。腎陽・精血を補う。

症例2-39 毒痢

神戸侯臣、中條仁兵衛、息、年二十。痢疾を患ひ、医、之を療して解せず。痢、益々甚だしく昼夜七、八行。其の色或は魚腸の如く、或は敗膿の如く臭気近づくべからず。肛門より直腸の間、糜爛を覚え毎に熱水重下し、下利の時、腸中より肛門まで苦楚忍ぶべからず。咽喉も亦た糜爛して乾燥し、冷水を好み食気なく、虚羸、脈数、殆ど危篤の候を見はす。余、以為へらく一種の毒痢とし、白頭翁加甘草阿膠湯を与へ甘汞丸を兼用す。服する二、三日、下物臭気を減じ苦楚少しく安し。連進四、五日、熱解し利大いに減ず。但だ心下虚痞、食進まず、時に嘔気あり、或は鮮血稀水を下す。因りて千金断痢湯を与へ数日にして痊を得たり。



意識

神戸侯の臣・中條仁兵衛の息子、二十歳。痢疾を患い、医者が治療しても解けない。痢はますますひどくなり昼夜七、八回。その色は魚の腸のようであったり腐った膿のようであったりして、悪臭が近づけないほど。肛門から直腸にかけて爛れを覚え、そのたびに熱い水が重く下り、下痢のときは腸から肛門まで耐えがたい苦しみがある。咽喉も爛れて乾燥し、冷水を好み食欲がなく、痩せ衰え、脈は数、ほとんど危篤の様相であった。私はこれを一種の毒痢とみて、白頭翁加甘草阿膠湯を与え、甘汞丸を併用した。二、三日で下る物の臭気が減り苦しみが少し和らいだ。続けて四、五日服用すると熱が解け痢が大いに減った。ただみぞおちが虚してつかえ、食が進まず、ときに嘔気があり、あるいは鮮血や薄い水を下す。そこで千金断痢湯を与え、数日で治った。著者は、後藤艮山が「痢は腸中に腫物ができるようなもの」と説き、西洋医も同趣旨を述べることに触れ、酷毒の痢に甘汞を用いた根拠としている。

深考

西洋医学的には重症の感染性腸炎ないし潰瘍性の大腸病変（赤痢・粘血膿性の下痢、直腸肛門の潰瘍）で、敗血症に近い危篤像と考えられる。膿血様で悪臭の強い下痢、腸管・咽喉の糜爛、消耗・頻脈から、著者は通常の痢ではなく酷毒の毒痢と診る。白頭翁加甘草阿膠湯（白頭翁・黄連・黄柏・秦皮で清熱解毒・涼血止痢、甘草・阿膠で陰を養い裏急を緩める）を主とし、甘汞丸（水銀剤）を併せて毒を駆る。これで臭気・苦楚が減り、熱と利が収まる。残る心下虚痞・嘔気・血水には千金断痢湯で胃を和し痢を止める。後藤艮山の「痢は腸中の腫物」、西洋の「腸脱疽」を同趣旨と評し、酷毒には甘汞という峻剤を用いた根拠を示している。重症痢を尋常の痢と区別して治法を変えた判断が要である。なお甘汞は水銀剤で毒性が強く、現代では用いない。

処方解説

白頭翁加甘草阿膠湯《金匱要略》：白頭翁・黄連・黄柏・秦皮・甘草・阿膠。清熱解毒・涼血止痢に養陰を加える。白頭翁（はくとうおう）はキンポウゲ科ヒロハオキナグサなどの根を基原とする生薬。苦・寒で、主に大腸の湿熱を清し、熱毒を解く「清熱解毒・涼血止痢」の薬である。『傷寒論』白頭翁湯の主薬で、黄連・黄柏・秦皮と配合し、熱痢による下痢、腹痛、裏急後重、血便などに用いる。とくに血熱を伴う赤痢様の下痢が目標となる。現代薬理学的にも抗菌・抗炎症作用などが報告されており、含有成分としてサポニン類が知られる。

甘汞丸（かんこうがん）：甘汞丸は華岡青洲の処方で、甘汞一錢と黄連解毒湯末三錢からなる。甘汞は塩化第一水銀（calomel： Hg_2Cl_2 ）で、甘汞（ Hg_2Cl_2 ）＝非選択的な水銀毒性を利用した攻毒薬 → 蛋白SH基に結合・酵素阻害 → 駆梅・殺菌作用を期待したが、宿主毒性も強い。江戸時代には梅毒などのウイルスを攻める駆梅・攻毒薬として用いられた。これに黄連・黄芩・黄柏・山梔子からなる黄連解毒湯を配し、三焦の熱毒を清する。すなわち、甘汞によって深く伏した黴毒を攻め、黄連解毒湯によってこれに伴う炎症・熱毒を鎮める構成である。浅田宗伯は黴毒を伴う婦人の帯下、とくに陰部の糜爛、疼痛、悪臭が強い場合などに兼用した。攻毒と清熱解毒を組み合わせた峻烈な駆梅剤である。

千金断痢湯《千金方》：半夏・乾姜・人參・黄連・附子・茯苓・甘草・大棗の8味。茯苓四逆湯加黄連半夏）浅田はこれを「半夏瀉心湯の変方」と捉え、「心下に水飲あり、既に陰位に陥りて下利止まざる者」、さらに諸薬が効かない難治性下痢に用いるとしています。久痢を止める方。

症例2-40 老人の停飲

小石川馬場、石丸七郎兵衛、年七十余。腹裏拘急、心下蓄飲あり、時々刺痛、酸水を吐す。四逆散加呉茱萸茯苓を与へて水飲稍や利し、刺痛止む。後、飲食進まず、心下痞し鬱々として閉居す半夏瀉心湯加香附子茯苓を与へ数日にして愈ゆ。此の証、諸医、皆、脾胃虚とし補洩して益々病塞す。余、其の脈沈実と少腹に力あるを以て、断じて前の二方を以て治す。老人と雖も其の根基を体認すべからず。

□ 拘泥：物事にこだわって自由な判断行動ができないこと。
〔漢字源〕



意識

小石川馬場の石丸七郎兵衛、七十余歳。腹がひきつり、みぞおちに水飲が溜まって、ときどき刺すように痛み、酸っぱい水を吐く。四逆散に呉茱萸・茯苓を加えて与えると、水飲がやや通じて刺痛が止んだ。後に飲食が進まず、みぞおちがつかえてふさぎ込んで閉じこもる。半夏瀉心湯に香附子・茯苓を加えて与え、数日で治った。この症を諸医は皆、脾胃の虚として補い収めたためにますます病が塞がった。私はその脈が沈実で下腹に力があることから、断じて前の二方で治した。老人といえども、その病の根本を見極めなければならない。

深考

西洋医学的には高齢者の機能性胃腸症ないし胃酸逆流（心窩部痛・吞酸・心下のつかえ）と考えられる。諸医は高齢ゆえ脾胃虚と決めつけ、補い収めて悪化させたが、著者は脈が沈実で下腹に力があることから、虚ではなく肝鬱気滞と停飲の実証と判断する。まず気滞と腹裏拘急を目標として四逆散に呉茱萸・茯苓を加えて肝胃の気を疏し寒飲を降ろし、刺痛と吞酸を止める。続く心下痞・抑うつには半夏瀉心湯に香附子・茯苓を加え、寒熱錯雑の痞を開き気を巡らせる。年齢に引きずられず脈と腹証で虚実を見極めたことが、補法の失敗を正した鍵である。老人だから虚とは限らないという戒めの例である。

処方解説

四逆散《傷寒論》加呉茱萸・茯苓：柴胡・芍薬・枳実・甘草に呉茱萸・茯苓を加える。疏肝・温化水飲。

半夏瀉心湯《傷寒論》加香附子・茯苓：半夏・黄芩・乾姜・人参・甘草・黄連・大棗に香附子・茯苓を加える。寒熱錯雜の心下痞を開く。

症例2-41 久しき寒泄

宮津侯臣、工東喜内、妻、年五十余。下痢久しく止まず。諸医、療して効なし。余、寒泄とし高良姜湯を与ふ。数日にして下痢止む。後、四肢微腫、小便不利、時々心下へ衝逆して痛み精気大いに劣す。乃ち真武加人參を与へ沈香降気加黄連呉茱萸を兼用し数旬にして痊ゆ。



意識

宮津侯の臣・工東喜内の妻、五十余歳。下痢が長く止まらず、諸医が治療しても効かない。私は寒泄（冷えによる下痢）とみて高良姜湯を与えると、数日で下痢が止んだ。後に四肢が軽く腫れ、小便が出ず、ときどきみぞおちへ衝き上げて痛み、精気が大いに衰えた。そこで真武湯に人参を加えて与え、沈香降気湯に黄連・呉茱萸を加えたものを併用して、数十日で治った。

深考

西洋医学的には慢性の下痢で脱水・全身衰弱を伴い、のちに浮腫と心窩部への衝き上げを呈した例と考えられる。長引く下痢を著者は寒泄（脾胃の虚寒による下痢）とみて高良姜湯で中を温め瀉を止める。下痢が止んだ後の四肢の浮腫・小便不利・精気の衰えは脾腎の陽虚と水気の現れとみて真武湯加人参で陽を温め水を化し気を補う。その後不安症状が出たのであろうか。心下への衝逆に気を鎮める沈香降気湯に黄連・呉茱萸を加え、気を降ろしつつ寒熱を調えている。

処方解説

高良姜湯：高良姜・厚朴・当帰・桂枝 の4味。浅田は「心腹絞痛」を主治とし、単なる腹痛ではなく、心窩部・胸側にかかる激しい痛みを目標にする。

真武湯《傷寒論》加人参：茯苓・芍薬・生姜・白朮・附子に人参を加える。温陽利水に補気を添える。

沈香降気湯加黄連・呉茱萸：沈香・砂仁・香附子・甘草などの降気方に黄連・呉茱萸を加える。辛開苦降で気を降ろし寒熱を調える。

症例2-42 腹満と水腫

御小納戸頭取、尾島主殿頭、年五十余。腹満水気あり。四肢洪腫、大小便不利、心下堅鞭。医、利水の薬を与へて効なし。余、木防已去石膏加茯苓芒硝湯を与へ、四、五日を経て腹満減じ心下稍や軟なり。後、香陸胃苓湯を与へ六味丸加牛膝車前子を兼用して全愈す。



意識

御小納戸頭取の尾島主殿頭、五十余歳。腹が張って水気があり、四肢がひどく腫れ、大小便が出ず、みぞおちが堅くこわばる。医者が利水の薬を与えたが効かなかった。木防已去石膏加茯苓芒硝湯を与えると、四、五日で腹満が減りみぞおちがやや軟らかくなった。後に香陸胃苓湯を与え、六味丸に牛膝・車前子を加えたものを併用して全快した。

深考

西洋医学的には心不全ないし腎性の全身浮腫（腹水・四肢浮腫・乏尿）で、心下が堅く張る重症と考えられる。通常の利尿薬が効かないのは、水が心下に堅く結している（支飲・水結）ため、著者は木防已湯から石膏を去り茯苓・芒硝を加えた方を用いる。木防已・桂枝で水を巡らせ通陽し、人参で支え、茯苓で利尿し、芒硝で堅い結を軟らげ下す。腹満が減り心下が軟らいだ後、香陸胃苓湯（胃苓湯に行気・利尿薬を加えたもの）で脾を運らせ水をさばき、六味丸加牛膝車前子で腎陰を補い利尿して仕上げる。堅い水結をまず軟下し、ついで脾腎を調えて水を去る段階的治療である。

処方解説

木防已去石膏加茯苓芒硝湯《金匱要略》：木防已・桂枝・人参・茯苓・芒硝。堅く結した支飲・水を軟下し利水する。

香陸胃苓湯：胃苓湯（蒼朮・厚朴・陳皮・甘草・猪苓・沢瀉・白朮・茯苓・桂枝・生姜・大棗）に行気・利水の薬（木香・商陸など）を加えた処方。

商陸はヤマゴボウの根、性味は苦寒。強い利尿作用と瀉下作用。強い粘膜刺激作用があり瀉下逐水するが、毒性が強い。

六味丸《小児薬証直訣》加牛膝・車前子：地黄・山茱萸・山薬・沢瀉・茯苓・牡丹皮に牛膝・車前子を加える。腎陰を補い利水する。

症例2-43 外感後の飲癖

浅草本願寺内、長敬寺。外感後、熱気解せず。舌上黄胎、心下鞭満して痛甚だしく、肩背刺痛、短気促迫す。大柴胡湯を与へ大陷胸丸を兼用す。四、五日を経て熱大いに解し痛和す。時に之を熟診するに左脇下痞あり。之を按ぜば、痛肩背に牽き、氣息を妨悶し脇下雷鳴す。其の人、平素鯨飲に因りて近来此れ塊をなすと云ふ。余、飲癖とし延年半夏湯を与へ硝石大円を兼用す。服する数旬にして癥癖全く消す。

□ 鯨飲：水や酒などを大量にぐいぐい飲む。〔漢字源〕

意識

浅草本願寺内の長敬寺。外感の後、熱が解けず、舌に黄苔があり、みぞおちが堅く張って痛みが甚だしく、肩背が刺すように痛み、息が短く切迫する。大柴胡湯を与え、大陷胸丸を併用すると、四、五日で熱が大いに解け痛みが和らいだ。そのときよく診ると左脇の下に痞癖がある。押さえると痛みが肩背に引き、息を妨げて苦しく、脇の下がごろごろ鳴る。本人は、平素の大酒（鯨飲）が原因で近ごろこの塊ができたという。私は飲癖とみて延年半夏湯を与え、硝石大円を併用すると、数十日で塊がすっかり消えた。

深考

西洋医学的には感染症後の上腹部の強い痛み・つかえに、慢性の上腹部腫瘤（飲酒に伴う肝脾腫や胃の停滞）が重なった例と考えられる。外感後の黄苔・心下鞭満・痛・短気は水熱が心下に結した結胸様の証で、大柴胡湯に大陷胸丸を併せて熱を下し水結を破る。熱と痛が解けた後に現れた左脇下の塊（按じて肩背に引き、脇下が雷鳴する）を、著者は平素の多飲による飲癖（水飲が脇下に結した痰癖）とみて、延年半夏湯で痰飲と気の停滞を降ろし、硝石大円で結を下して数十日で塊を消した。急性の結胸をまず処理し、背景の飲癖を後から消すという二段の運びで、塊の本体を水飲と読んだ診立てが要である。

処方解説

大柴胡湯《傷寒論》：柴胡・黄芩・半夏・芍薬・枳実・大黄・生姜・大枣。

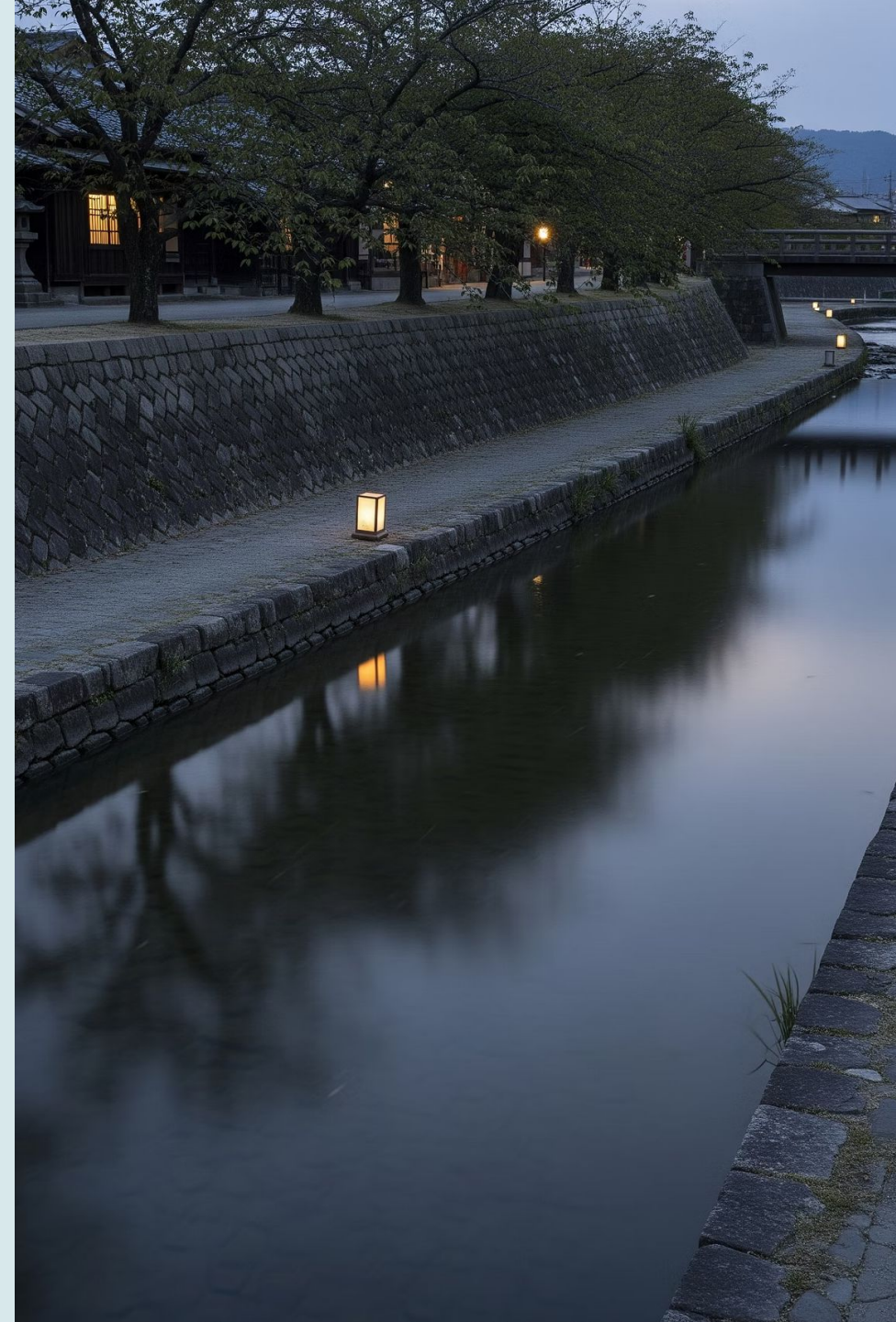
大陷胸丸《傷寒論》：大黄・芒硝・葶藶子・杏仁（甘遂・白蜜）。湯より緩やかに胸腹の水結を下す。

延年半夏湯《外台秘要》：半夏・柴胡・鼈甲・桔梗・檳榔子・枳実・人参・呉茱萸・生姜。痰癖・飲癖を降ろす。

硝石大円：大黄・芒硝・甘草・人参の4味で、「腹中結痛、心下痞硬」を主治
硝石は硝酸カリウム KNO_3 だが浅田家では芒硝 Na_2SO_4 の可能性が高い。

症例2-44 吐水と奔豚

築地柳原街、二河屋兼次郎、妻、年三十七、八。年来、吐水を患ひ将に反胃を為さんとす。心下より背にかけ痛甚だし。小半夏加茯苓を与へ起廃丸を兼用して吐水止み痛安し。一日、気少腹より心中に上撞し語言出でず四肢厥冷す。家人骸きて急を告ぐ。余、診して奔豚とし、肘后奔豚湯を与へ沈香気加黄連呉茱萸を兼用して治す。是より後、四時の際、吐水止み奔豚を発し、奔豚止まば吐水を発するに従りて、互ひに之を制し、病、十之七、八を減ず。



意識

築地柳原街の二河屋兼次郎の妻、三十七、八歳。長年、水を吐く症を患い、今にも反胃（食べ物を吐き戻す病）になろうとしていた。みぞおちから背にかけて痛みが甚だしい。小半夏加茯苓湯を与え、起廃丸を併用すると、吐水が止み痛みが和らいだ。ある日、気が下腹から胸の中へ突き上げて言葉が出ず、四肢が冷えきった。家人が驚いて急を告げた。私は奔豚とみて、肘后奔豚湯を与え、沈香降気湯に黄連・呉茱萸を加えたものを併用して治した。これ以後、季節の変わり目に、吐水が止めば奔豚を発し、奔豚が止めば吐水を発するというように、互いに制し合って、病は十のうち七、八ほど減った。

深考

西洋医学的には慢性の嘔吐（胃の停滞・逆流）と、発作性の動悸・のぼせ・四肢冷感を伴う不安発作（奔豚）が交互に現れた例と考えられる。吐水は胃に水飲が停まって上逆したものとみて小半夏加茯苓湯（半夏・生姜・茯苓）で水飲を降ろし、起廃丸を併せて反胃を防ぐ。下腹から胸へ突き上げて言葉が出ず四肢が冷える発作は奔豚気とみて、肘后奔豚湯で衝逆を鎮め、沈香降気湯に黄連・呉茱萸を加えて気を降ろし寒熱を調える。吐水と奔豚が交互に出るのは、同じ水飲・気逆が胃と衝脈のどちらに現れるかの違いとみて、両者を相互に制して病勢を大きく減じた。一つの病機（水飲と気逆）が二つの症状に分かれて現れることを見抜いた例である。

処方解説

小半夏加茯苓湯《金匱要略》：半夏・生姜・茯苓。胃の水飲を降ろし嘔吐を止める。

起廃丸：反胃・噎膈に用いる丸。附子・川烏・草烏・当帰・川芎・地黄・杜仲・牛膝・虎脛骨 温陽・活血・強筋骨の薬物を中心とした処方

肘后奔豚湯《肘後備急方》：奔豚の衝逆を鎮める方（甘草・李根白皮・呉茱萸・半夏・桂枝・生姜・人参）。

沈香降気湯加黄連・呉茱萸：沈香・砂仁・香附子・甘草などに黄連・呉茱萸を加える。構成は未確認。

症例2-45 小児の痙癖

貝淵侯臣、伊藤弥八郎、女、年十一。心下堅癖あり。肩背強急、飲食節ならず。外感すれば必ず熱解せず。将に骨蒸をなさんとす。四逆散加鼈甲茯苓を与へて熱解す。後、延年半夏湯加甘草を作り毎に服せしむ半年許り、堅癖去り強健常人の如し。此れより先、兄二人、皆、疝労を發して死す。余、知る。痙癖労を為す其の害、真に懼るべしとす。



意識

貝淵侯の臣・伊藤弥八郎の娘、十一歳。みぞおちに堅い塊（堅癖）があり、肩背が強くこわばり、飲食が不規則である。外感にかかると必ず熱が解けず、今にも骨蒸（慢性の微熱）になろうとしていた。四逆散に鼈甲・茯苓を加えて与えると熱が解けた。後に延年半夏湯に甘草を加えたものを作って毎日服させること半年ほどで、堅い塊が去り、健康な常人のようになった。これより前、兄二人がいずれも疝労を発して死んでいる。私は、痙癖が労（慢性消耗性疾患）になると、その害は真に恐ろしいものだと知った。

深考

西洋医学的には小児の慢性微熱・体力低下に上腹部腫瘤を伴う例で、結核様の消耗（骨蒸・瘵労）への進展が懸念される。兄二人が瘵労で死んでいることから素因がうかがえる。著者は心下の堅癖（脇下の積）を病の根とみて、まず四逆散に鼈甲・茯苓を加え、肝を疏し鼈甲で積を軟らげ熱を解く。急性の熱が引いた後は延年半夏湯加甘草を半年常服させ、瘵癖そのものを消して体を立て直した。微熱を骨蒸として滋陰するだけでなく、熱の源である瘵癖を根気よく消したことで強健に復している。慢性化した瘵癖が労（消耗性疾患）へ進む危険を見据え、根を断つことを優先した予防的治療である。

処方解説

四逆散《傷寒論》加鼈甲・茯苓：柴胡・芍薬・枳実・甘草に鼈甲（軟堅・退熱）・茯苓を加える。

延年半夏湯《外台秘要》加甘草：半夏・柴胡・鼈甲・桔梗・檳榔子・枳実・人参・呉茱萸・生姜に甘草を加える。痙癖を消す。

症例2-46 外感後の肺癰

檜物街岸、藁舗主人、年五十所り。外感後、胸脇満、舌上黄胎、渴して冷水を好み不大便三、四日、寒熱往来、飲食を欲せず。余、大柴胡湯加石膏を与へ、二、三日にして大便通じ、熱大いに減ず。時に咳嗽を発し臭痰を吐す。乃ち肺癰を醸すを知り、肺癰湯を用ひ一老医の獺肝散を兼服せしむ。四、五日にして臭痰止み肺癰の症候、速やかに愈ゆ。獺肝散方：犀角一錢、獺肝二錢、桔梗三錢、甘草一錢、竜腦五分。右五味、研末し分けて七貼とし、一日に一貼、温水に送下す。



意識

檜物街岸の藁屋の主人、五十歳ほど。外感の後、胸脇が張り、舌に黄苔があり、口が渇いて冷水を好み、便が三、四日出ず、寒熱往来があって飲食を欲しない。大柴胡湯に石膏を加えて与えると、二、三日で便が通じ熱が大いに減った。そのとき咳が出て臭い痰を吐いた。そこで肺癰を醸していると知り、肺癰湯を用い、ある老医の獺肝散を併せて服させると、四、五日で臭い痰が止み肺癰の症候が速やかに治った。獺肝散方：犀角一錢・獺肝二錢・桔梗三錢・甘草一錢・竜腦五分。右の五味を粉末にして七包に分け、一日に一包、温水で飲み下す。

深考

西洋医学的には感染症の経過中に肺化膿症（肺膿瘍）を併発した例で、悪臭のある膿性の痰がその徴である。外感後の胸脇満・黄苔・口渴・便閉・寒熱往来は少陽陽明の熱とみて大柴胡湯に石膏を加えて下し清める。便が通じ熱が減った後に咳と臭痰が出たことから、著者は熱毒が肺に結して肺癰をなしたと判断し、肺癰湯で排膿し、獺肝散（犀角で涼血解毒、獺肝で労熱を治し、桔梗で排膿、竜腦で透泄する）を併せて臭痰を止め肺癰を治した。陽明の熱を下してから肺の化膿に転じて対応するという、病位の移りに沿った治療である。獺肝散は原文に分量（犀角一錢・獺肝二錢・桔梗三錢・甘草一錢・竜腦五分）まで記される。

処方解説

大柴胡湯《傷寒論》加石膏：柴胡・黄芩・半夏・芍薬・枳実・大黄・生姜・大枣に石膏を加える。

肺癰湯：桔梗・杏仁・栝楼根（天花粉）・白芥子・貝母・黄芩・甘草の7味。原南陽の創方で、肺癰の初期に用いる処方である。桔梗は肺氣を開いて排膿を促し、杏仁は肺氣を降ろして咳嗽を鎮める。貝母は清熱化痰し、白芥子は粘稠で深く停滞した痰を温化して動かす。栝楼根は肺熱を清して津液を補い、黄芩は肺の熱毒を清し、甘草は諸薬を調和するとともに咽喉・気道の炎症を鎮める。すなわち、肺に熱毒が鬱滞し、痰が凝結して化膿へ向かう初期段階を、清熱・化痰・排膿によって治す方剤である。寒熱や胸痛が強ければ、まず柴胡桔梗湯加葶藶で清解し、その後に本方を用いる。臭膿が多い場合には獺肝散を兼用する。

獺肝散：犀角・獺肝・桔梗・甘草・竜腦（原文に分量記載）。涼血解毒・排膿し肺癰を治す。

症例2-47 反胃

生実侯臣、内海某妻、年二十六、七。反胃を患ひ数旬愈えず。羸瘦骨立す。衆医、雑治して寸効なし。且つ薬気を聞けば忽ち嘔して飲む能はず。余、黙思すらく、是、胃中不和より反胃をなし心下停飲ありて物を拒隔し納るる能はず。宜しく胃気を扶けて心下の飲を鎮降すべしと。旋覆代赭石湯（御種人参三分を用ふ）を作り再煎して徐々に嚥下せしむ。厳にし、一日、蕎麦麵少し許りを喫せしめ数日にして益々安し。是に於て稀粥少し許りを交へ喫せしめ、前方を連服すること数旬にして年所の病全愈す。

意識

生実侯の臣・内海某の妻、二十六、七歳。反胃を患い数十日治らない。痩せ衰えて骨が浮き出ている。多くの医者がいろいろ治療したが少しも効かず、しかも薬の匂いを嗅ぐとたちまち嘔吐して飲めない。私は黙って考えた——これは胃中の不和から反胃となり、みぞおちに水飲が停まって物を拒んで受けつけないのだ。胃気を扶けてみぞおちの水飲を鎮め降ろすべきだ、と。旋覆代赭石湯（御種人参は三分を用いる）を作り、再煎して（薄め）徐々に飲み下させた。厳しく節食させ、一日に蕎麦麺を少しだけ食べさせ、数日でますます落ち着いた。そこで稀粥を少し交えて食べさせ、前の方を続けて服させること数十日で、長年の病が全快した。

深考

西洋医学的には慢性の嘔吐・通過障害（胃の運動低下や狭窄）による高度のるい瘦で、薬の匂いだけで嘔吐するほどの胃の過敏を伴う。著者は胃気の不和と心下の停飲が飲食を拒んでいるとみて、胃気を扶けつつ停飲を鎮め降ろす方針を立てる。旋覆代赭湯（旋覆花・代赭石で降逆し、半夏・生姜で化飲止嘔し、人参・甘草・大棗で胃気を補う）を、嘔吐を避けるため再煎して薄め少量ずつ嚥下させる与え方の工夫が要点である。あわせて厳しく節食し、蕎麦汁から稀粥へと少量ずつ慣らす食養を併せた。薬の処方だけでなく、与薬法と段階的な食事管理で胃を立て直した点に、前巻の反胃・食養重視（断食の論）と通じる姿勢がある。

処方解説

旋覆代赭湯《傷寒論》：旋覆花・代赭石・人参・半夏・甘草・生姜・大棗（本案は人参を少量＝三分用い、再煎して薄め少量ずつ与える）。胃気を補い気逆を降ろし停飲を鎮める。

症例2-48 疫眼

御書物奉行、武島八十八、息、年十八、九。両眼暴に赤腫、熱涙、淋漓、開くこと能はず。頭痛破るが如く眼球痛みて突出せんとし、脈数悪寒す。余、診して曰く、疫眼なり（眼科称して風眼とす）。病、外証に属す。重く発汗すべし。因りて大剤の大青竜湯加車前子を作り連服せしめ温覆発汗す。翌日、頭痛悪寒止み、眼痛大いに減じ、目少しく開くを得たり。之を視るに白眼血を漉くが如く、瞳仁うるみて翳膜を生ぜんとす。乃ち外台謝道人大黄湯加滑石車前子を与へ、四、五日にして全愈す。



意識

御書物奉行・武島八十八の息子、十八、九歳。両眼が急に赤く腫れ、熱い涙があふれて開けられず、頭痛は割れるようで、眼球が痛んで突き出そうになり、脈は数、悪寒がする。私は診て、これは疫眼だ（眼科では風眼という）、病は外証に属する、しっかり発汗させるべきだと言った。そこで大青竜湯に車前子を加えた大剤を作って続けて服させ、温かく覆って発汗させた。翌日、頭痛と悪寒が止み、眼痛が大いに減じて、目が少し開けられるようになった。見ると白目が血を濺したように充血し、瞳がうるんで翳膜ができようとしていた。そこで外台の謝道人大黄湯に滑石・車前子を加えて与え、四、五日で全快した。著者は、世の眼科が初めから大黄・芒硝を用いて壞証を招く誤りを戒め、疫眼は外感ゆえ初期に発表すれば軽症は速治すると説き、「先表後裏は仲景の万病の模範」と述べている。

深考

西洋医学的には急性の重症結膜炎・角膜炎（流行性角結膜炎）で、発熱・頭痛・悪寒という全身症状を伴う。著者の眼目は、これを局所の眼病でなく外感（疫眼・風眼）と捉える点にある。脈数・悪寒・頭痛という表証があるため、初手から大黄・芒硝で下すのではなく、大青竜湯に車前子を加えて温覆発汗し表邪を散らす。これで頭痛・悪寒・眼痛が大きく引く。残った充血・翳膜という余熱には外台謝道人大黄湯に滑石・車前子を加えて清熱利水する。後段の風眼論は、眼科が初めから瀉下して壞証を招く誤りを戒め、外感は一先表後裏（まず表を解いてから裏を処理する）という傷寒の常法が眼科・瘍科・女科にも通じると説く。眼病を全身の外感として診た発想の転換が要である。

処方解説

大青竜湯《傷寒論》加車前子：麻黄・桂枝・甘草・杏仁・生姜・大棗・石膏に車前子を加える。温覆発汗して表邪を散らす。

謝道人大黄湯《外台秘要》：大黄、黄芩、芍薬、甘草、細辛 加滑石・車前子
宗伯は「天行赤眼、或は睛腫雲翳を生じ、炊痛する者」を治すとしている。急性の眼の充血・腫脹・疼痛・熱感が強いものが主眼。

紫円（代赭石、赤石脂、巴豆、杏仁）峻下逐水・降逆消積

涼膈散《和剂局方》連翹、黄芩、山梔子、大黄、薄荷、芒硝、甘草、竹葉、蜂蜜
去芒硝加桔梗・石膏・菊花・木通・車前子。

症例2-49 疥癬の耳聾

和歌山侯臣、上山久左衛門、年六十余。疥癬を患ひ、卒に耳聾し一年余りいえず。医、発表攻裏す。手を尽して験なし。余、血燥とし先づ四物加浮萍荊芥を与ふ。服する数日、皮膚大いに潤し瘡より稀汁を発す。後、湿熱熾んにして口渴煩躁、夜眠るを得ず。因りて解毒剤に黄連解毒湯を合して服せしめ、数旬にして全治す。



意識

和歌山侯の臣・上山久左衛門、六十余歳。疥癬を患い、にわかに耳が聞こえなくなつて一年余り治らない。医者が発表・攻裏の手を尽くしたが効がなかった。私は血燥（血が乾いた状態）とみて、まず四物湯に浮萍・荊芥を加えて与えた。数日服用すると皮膚が大いに潤い、瘡から薄い汁が出た。後に湿熱が盛んになって口が渴き、煩わしくいらだって夜眠れなくなった。そこで解毒剤に黄連解毒湯を合わせて服させ、数十日で全治した。著者は、疥癬や梅毒など上部に及ぶ毒は内が乾ききって上に至ったもので肌肉が乾き熱状があるから、水銀剤で攻めるのは逆上させ乾かすゆえもってのほかで、まず四物・八物の類で滋潤し血液を増せば下部へ毒が移って治しやすいと説く。

深考

西洋医学的には高齢者の皮膚疾患（疥癬・梅毒様）に伴う難聴で、強い発汗・瀉下の治療が無効だった例と考えられる。著者は、毒が上部（耳・眼・鼻）に及ぶのは内が乾ききった結果であり、筋肉が乾いて熱を帯びていると捉える。だから乾いたものをさらに攻める（発表攻裏や水銀剤）のは逆で、まず潤すべきだとして四物湯に浮萍・荊芥を加え、血を養いつつ表へ透発させる。すると皮膚が潤い瘡から汁が出る（毒が外へ向かう徴）。続く湿熱の口渇・煩躁・不眠には解毒剤に黄連解毒湯を合わせて清熱解毒する。後段の論は、上部の毒は滋潤（四物・八物）で血液を増せば下部へ毒が移って治しやすくなり、乾いたものを妄りに攻めると害になると説く。攻める前に潤すという、燥証の毒に対する治法の転換が核心である。

処方解説

四物湯《和剤局方》加浮萍・荊芥：当帰・川芎・芍薬・地黄に浮萍・荊芥を加える。
血を養い表へ透発させる。

黄連解毒湯《外台秘要》：黄連・黄芩・黄柏・山梔子。清熱解毒。本案は解毒剤（土茯苓を主とする駆毒方）と合方する。

（論中で挙げる方）六物解毒湯に生地黄・当帰・麦門冬を加える、四物湯に知母・黄柏・黄芩・黄連・大黄を加える。解毒剤の構成の全容は未確認。

症例2-50 脚気後の痿弱

築地小田原街の書役、啓蔵。脚気腫を患ひ水
気去るの後、両脚痿弱起つを得ず。数月、百
治効なく廃人の如し。余、診して曰く、血氣
枯燥筋脈栄を失す。加之のみならず湿毒少
しく流着す。宜しく其毒を発揮し以て血氣を
滋すべし。四物湯加亀石決明を与へ化毒丸十
五粒を兼用す。服する数旬、起歩常に復す。

意識

築地小田原街の書役・啓蔵。脚気の腫れを患い、水気が去った後、両脚が痿え弱って立てなくなった。数か月、あらゆる治療をしても効がなく、廃人のようであった。私は診て、血気が枯れ乾いて筋脈が栄養を失っている、そのうえ湿毒が少し流れ着いていると言った。その毒を発散させて血気を滋すべきだとして、四物湯に亀板・石決明を加えて与え、化毒丸を十五粒併用した。数十日服用すると、起き歩くことが常のように戻った。

深考

西洋医学的には脚気の浮腫が引いた後に残った下肢の筋力低下・歩行不能で、消耗性の筋萎縮を思わせる。著者は、水気が去った後の痿弱を、血と津が枯れて筋脈が栄養を失ったもの（血気枯燥）に、なお残る湿毒が少し絡んだ状態と読む。利水を続けるのではなく、四物湯に亀板・石決明を加えて血と陰を養い筋脈を滋し、化毒丸を併せて残る湿毒を去る。利水で水を抜いた後は補って筋を養うべきで、湿毒の処理を少量併せる程度にとどめた配分が要である。前巻の脚気が衝心で急変した例と異なり、浮腫後の痿弱という回復期の病態に対し、補血滋潤を主とした立て直しの治療である。

処方解説

四物湯《和剤局方》加亀板・石決明：当帰・川芎・芍薬・地黄に亀板（滋陰養血・補腎）・石決明（平肝・潜陽）を加える。血と陰を養い筋脈を滋す。

化毒丸：大黄、黄連、青黛、穿山甲、硃砂、雄黄
駆毒を目的とする丸（経験方）。

大黄・黄連・青黛で熱毒を清し、大黄・穿山甲で瘀滞・凝結を破り、雄黄で解毒し、硃砂で鎮静する。雄黄（ヒ素化合物）・硃砂（水銀化合物）を含む